

Title	サハラ以南に関するアラビア語資料(2)
Author(s)	竹田, 新; 西尾, 哲夫
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.161-p.171
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81229
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

サハラ以南に関するアラビア語資料 (2)

竹田 新, 西尾 哲夫

Arabic external sources of East and West Africa (II)

Shin TAKEDA, Tetsuo NISHIO

The following (continued from our previous article “Arabic external sources of East and West Africa (I)” *Journal of Osaka University of Foreign Studies* 76, pp. 83–101, 1988) is the annotated translations of Arabic materials related to East and West Africa (“as-Sūdān” and “az-Zanj”).

We will translate and annotate Ibn Khurdādhbih’s *al-Masālik wa’l-Mamālik*, al-Balādhurī’s *Futūḥ al-Buldān*, al-Ya ‘qūbī’s *al-Buldān*, and ad-Dīnawarī’s *al-Akhbār aṭ-Ṭiwāl*.

前稿（「サハラ以南に関するアラビア語資料 (1)」大阪外国語大学学報76号）に引き続き、アラビア語文献に現れるスーダーン (as-Sūdān) 及びザンジュ (az-Zanj) 関係の記事を翻訳、紹介する。

VII

イブン・ホルダーズベ (Ibn Khurdādhbih) の名で知られる Abū ‘l-Qāsim ‘Ubayd Allāh b. ‘Abd Allāh は、820年頃ホラーサーン（イラン北東部）に生まれる。祖父 Khurdādhbih はアッバース朝の宰相 Barmak 家の要請でゾロアスター教からイスラームに改宗したベルシャ人で、父はタバリスターン（カスピ海南岸部）の総督を務めた人物である。彼はバグダードで文芸の教育を受け、官吏となる。ジバール（イラン西部、旧メディア）の駅逦局長を務めた後、バグダード及びサーマラー（バグダードの北、当時アッバース朝の首都）の駅逦庁に戻り、カリフ al-Mu‘tamid（在位870～92年）の愛顧を得て宮廷サロンでも活躍し、大宮人の教養書を数種著す。没年は885年頃とも912年頃とも言われている。

アッバース家の公子の依頼により、官庁の公文書を利用して執筆したと言われるイスラーム帝国の道里記『諸道と諸国（州）の書（*Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*）』（初稿846年頃，再稿885年頃）は，as-Sawād 州（下メソポタミア），[バグダードより] 東方（と東海），西方（とビザンツ），北方，南方などを扱い，諸道と，諸州の行政区分や租税を記している。

彼のイスラーム帝国内に関する記述は信頼に置けるものだが，遠方の地域，特にサハラ以南に関しては，単なる伝聞の域を出ない。

Abū 'l-Qāsim 'Ubayd Allāh b. 'Abd Allāh Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1889¹⁾

シフル (ash-Shihir) からアデン ('Adan) までは百バラサング (falsakh) ある²⁾。そこ（アデン）は大きな港の一つで，農耕も牧畜もないが，龍涎香・沈香・麝香と，シンド (as-Sind)・インド (al-Hind)・中国 (aṣ-Ṣīn)・ザンジュ・ハバシャ (al-Ḥabasha)³⁾・ファールス (Fārus)・バスラ (al-Baṣra)・ジュッダ (Judda)・クルズム (al-Qulzum) の物産がある⁴⁾。この辺りの海は大東海⁵⁾で，良質の龍涎香が取れる。そしてこの海にザンジュ・ハバシャ・ファールスが面している⁶⁾。[pp. 60-61]

ハーリジーのスフル派 (al-Khārijī aṣ-Ṣufri)⁷⁾の手にはダルア (Dar'a)⁸⁾がある。そこは住民の多い大きな町で，銀山がある。そして南はハバシャの国⁹⁾となる [p. 88]

彼 (Idris¹⁰⁾ の子孫)の手には，……その海¹¹⁾の方面に向かい合う所まで，ザーギーの息子ザーギー (Zāghī b. Zāghī)¹²⁾及び裸のスーダーン人¹³⁾の国に隣接する土地がある¹⁴⁾。[p. 89]

大地全体は五百年行程の大きさで，三分の一が人の住む開けた地，三分の一が人の住まぬ荒れ果てた地，三分の一が海であると分かった。そして，ハバシャ¹⁵⁾とスーダーン¹⁶⁾の地が七年行程，エジプト (Miṣr) の地がスーダーンの地の六十分の一，スーダーンの地が大地全体の六十分の一であると分かった¹⁷⁾。[p. 93]

ザンジュの国に入った者は必ず介鮮に罹る¹⁸⁾。[p. 170]

エジプトのナイル (Nīl Miṣr) は，南方 (al-yaman) にある月の山から流れ出て，赤道の後ろにある二つの湖に注ぎ込む。そしてヌビア (an-Nūba) の地を巡って，エジプトへと至る¹⁹⁾。[p. 176]

VIII

アル・バラズリー (al-Balādhurī) の名で知られる 'Aḥmad b. Yahyā b. Jābir al-Balādhurī が書いた「*Futūḥ al-Buldān* (諸国征服史)」は，ムハンマドの時代からアッバース朝初期までのアラブによる征服活動を記したものである。著者自身の経歴については，不明な点が多いが，少なくともイラン系であったらしい。また，バグダードのアッバース朝カリフに仕え，279/892年頃同地で没したらしい。同書の情報のほとんどは，Ibn 'Abd al-Hakam の征服史の記録と一致しており（資料(1)のⅢを参照），当時流布していた同じ情報源に拠ったものと考えられる。しかしながら，彼の記述態度は，Ibn 'Abd al-Hakam とは幾分異なり，複数の伝承による情報が一致する場合は，確

実性の高い史実とみなして伝承経路 ('isnād) を省略し、一致しない場合は、その典拠として伝承経路を付している (C. H. Becker-[F. Rosenthal] 'al-Balādhurī' EI² I pp. 971-72 参照)。

'Aḥmad b. Yaḥyā b. Jābir b. al-Balādhurī, *Futūḥ al-buldān*, ed. M. J. de Goeje, *Liber expugnationis regionum, auctore al-Belādiri*, Leiden 1863-6¹⁾。

……彼 (= 'Abd Allāh b. al-Ḥabḥāb)²⁾ は 'Abd ar-Raḥmān b. Ḥabīb b. 'Abī 'Ubayda b. 'Uqba b. Nāfi' al-Fihri にスース (as-Sūs) とスーダーンの地を襲撃させた³⁾。彼はそれまでに誰一人見たこともないほどの大成功を収め、同地で女奴隷二人を獲得したのだが、彼女たちには乳房が一つしかなかった。彼ら (= 彼女たちの属する種族) はタラージャーン (tarājān)⁴⁾ と呼ばれている。[pp. 231-32]

……'Abū 'Ubayd al-Qāsim b. Sallām⁵⁾ が我々に伝えるところによれば、彼には 'Abd Allāh b. Ṣāliḥ が、そして彼には Ibn Luhay'a が、そして彼には Yazīd b. 'Abī Ḥabīb が伝えたのであるが、我々と黒人たち (al-'asāwid)⁶⁾ の間には、契約や盟約はないのだ。我々と彼らの間には、我々が彼らに幾分かの小麦とレンズ豆を供与し、彼らが我々に奴隷⁷⁾ を供与するという条件での休戦があるだけだ。彼らから、或は彼ら以外から、彼らの奴隷を買っても悪いことはないのだ⁸⁾。[p. 237]

IX

ヤアクービー (al-Ya'qūbī, 即ち Abū 'l-'Abbās Aḥmad b. Ishāq b. Ja'far b. Waḥb b. Wāḍiḥ, 839年頃~897年或は907年) の地理書『国々の書 (Kitāb al-Buldān)』は、彼がマグリブ (北アフリカ) の Rustam 朝の書記を経て、エジプトの Ṭulūn 朝に仕えてから書かれたもの (889~90年) である。この書は当時のイスラーム圏の地誌で、バグダードとサーマッラー、[バグダードより] 東方 (実際は東北)、南方 (西南)、北方 (東南と北)、西方 (西北) を扱っている。西方の描写に登場する黒人奴隷やサハラ縦断ルートに関する記述は貴重なものである。

Aḥmad b. Abī Ya'qūb b. Ja'far b. Waḥb b. Wāḍiḥ (al-Ya'qūbī), *Kitāb al-Buldān*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1892¹⁾

金 山

……アッラーキー (al-'Allāqī) 溪谷²⁾とその周辺は金山である。付近一帯で人々が働くが、商人もその他の者も全員、黒人 (sūdān) 奴隷 ('abīd)³⁾ を所有している。奴隷が採掘作業を行い、石黄のような砂金を取り出す。その後、砂金は棒にされる。……[p. 334]

ザウィーラ (Zawīla)⁴⁾

そ (= Waddān) の後ろ、南方にはザウィーラの町がある。住民はムスリムで全員イバード派 (Ibādīya)⁵⁾ に属し、聖殿 (= メッカのカアバ) へ巡礼を行う。そして大多数が R. way. h(?)⁶⁾ である。また、ミール人 (Mīriyūn)⁷⁾、ザガーワ人 (az-Zaghāwīyūn)⁸⁾、マラワ人 (al-Marawīyūn)⁹⁾ 他、近くにいる種々のスーダーン人を捕らえては、黒人奴隷 (raqīq) として輸出する¹⁰⁾。私の伝え聞く

ところでは、スーダーン人の王たちは何の理由もなく、また戦争をした訳でもないのに、スーダーン人を売る。……ザウイーラの後ろ、十五日行程にカワール (Kawār)¹¹⁾ と言われる都市がある。種々のムスリム住民がいるが、大多数はベルベル人 (Barbar) で、彼らはスーダーン人〔奴隷〕を連れてくる。……[p. 345]

最果てのスース (as-Sūs al-Aqṣā)¹²⁾

……スィジルマーサ (Sijilmāsa)¹³⁾ から南方へ、種々のスーダーン人がいるスーダーン人の地を目指して道をとる者は、荒野と砂漠を五十日行程進む。その後、砂漠でサンハージャ族 (Ṣanhāja) に属するアンビヤ (Anbiya)¹⁴⁾ と言われる人々に出会う。彼らは定住せず、全員が頭巾で顔を覆うのが習慣である。……それから、ガスト (Ghaṣṭ)¹⁵⁾ と言われる町に至る。開けた溪谷で、住居と言うものがある。また、そこには彼らの王がおり、宗教も法も知らないが、多くの王国があるスーダーン人の国を襲う¹⁶⁾。[p. 360]

☆☆☆☆☆☆☆☆

シフル産の龍涎香¹⁷⁾の次にザンジュ産の龍涎香がある。それはザンジュの国からアデンにもたらされるもので、白い龍涎香である。……そ(=インド産の龍涎香)の次はザンジュ産のもので、ザンジュの海岸地方からもたらされる。それはインド産に似ており、近い。[pp. 366-67, —an-Nuwayrī, *Kitāb Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab*¹⁸⁾, cod. Leiden 273, p. 794—]

X

アッ・ディーナワリー (ad-Dīnawarī) の名で知られる 'Abū Ḥanīfa 'Aḥmad b. Dāwūd ad-Dīnawarī は、イラン系の学者で、イランのメディア (Media, al-Jibāl) 地方の Dīnawar で生涯を送り、894 (または895) 年頃没した。その経歴には不明な点が多いが、言語学、文学、植物学、天文学、地理学、数学等の広い分野で活動しており、著書も多い。しかしながら、完全な形で現存するのは「*Kitāb al-'Akhbār at-Tiwāl* (長き情報の書)」のみである。同書は、宇宙の創造からカリフ al-Mu'tasim の没年 (842年) までの年代記であるが、著者の主な関心はアラブとペルシアの歴史にあり、網羅的記録というよりは、重要な事件の首尾一貫した描写を主眼としており、イラン人側からみた通時的記述として重要である。また、同書は、当時現存していた史書を要約し、文学的読み物として書かれたものらしく、伝承経路 ('isnād) については一切示されておらず、複数の伝承がある場合は、著者 (の立場) にとって都合のいい方が選ばれている。(黒柳恒男「アラビア史料覚え書——アッディーナワリー：長き物語の書について」(『アジア・アフリカ詳論』7 pp. 18-22), B. Lewin 'al-Dīnawarī' EI² II pp. 300-301 参照)。

'Abū Ḥanīfa 'Aḥmad b. Dāwūd ad-Dīnawarī, *Kitāb al-'Akhbār at-Tiwāl*, ed. V. Guirgass,

Leiden 1888¹⁾.

それから、彼ら（＝ヤベテの子孫）の次にノアの息子のハム (Hām b. Nūh) の子孫が出たが、彼らもまた七人兄弟であって、シンド、インド、ザンジュ、コプト (al-Qibt), アビシニア (Habash)²⁾, ヌビア, カナーン (Kan‘ān)[の人々] である。そして彼らは南と西の間にある地域を占めた³⁾。[p. 4]

……アブラハ（‘Abraha）⁴⁾ は準備をして、多くの人々と西 (al-maghrib) の地を目指して行った。彼の後、彼の息子のイフリーキース（‘Ifriqīs）⁵⁾ が王位を継承した。彼はスーダーンの地に深く侵入したが、[そこの人々は] 彼に恭順を示した。そして、彼は彼らの土地を通して進み、やがて目と口が胸にある民のところに至った。彼らはノア——彼の上に平安あれ——の子孫たちで、神の怒りにふれその姿を神が変えてしまったのだと言われている⁶⁾。彼らも彼（＝イフリーキース）に恭順を示し、それで彼はそこを去り、戻っていった。そして、彼は an-NSnās⁷⁾ と呼ばれる民のそばを通った。彼らは男も女も、頭が半分で、顔も半分で、目が一つで、胴体が半分で、手が一本、足が一本であり、駿馬が走りさるより速くとびはねる。彼らは ‘Ālij というイエメン (al-yaman) 地方の砂地の後方の海 [の] 岸にある密林をうろついている⁸⁾。彼らについてたずねると、彼らはノアの息子のセムの息子のイラム（‘Iram）⁹⁾ の息子のワバル（Wabār）¹⁰⁾ の子孫であると知らされた。

[p. 15]

……[インド制圧の後] 彼（＝アレキサンダー）¹¹⁾ は進み、やがてスーダーンの地に入った。そこで彼は、鳥¹²⁾ のような裸で裸足の人々が密林の中を歩き回り、実を食べているのを見た。彼らは旱魃で飢饉に苦しむと、お互いに食べあった。それから、彼は彼らのところを通過して海に到着し、そしてイエメンの地のアデンの海岸へ渡った。[p. 36]

Ibn ‘Abbās¹³⁾ から語られるところによれば、ノアは大地を彼の三人の子供に分けた。……ハムには、ナイル川の後方、西風の吹く所までを割り当て……また語られるところによれば、大地は24,000パラサングであり、そのうちトルコ人 (al-‘Atrāk) の地は、3,000パラサング、ハザル人 (al-Hazar) の地は、3,000パラサング、中国人の地は、2,000パラサング、インド人、シンド人、ハバシャ人、そして残りのスーダーン人の地は、6,000パラサング、ビザンツ人 (ar-Rūm) の地は、3,000パラサング、スラブ人 (aṣ-Ṣaqāliba) の地は3,000パラサングである。カナーンの地は、エジプトとそしてその後方にあるイフリーキヤ（‘ifriqiya）、タンジェ (Ṭanja)、フランク (Firanja)、アンダルシア (al-‘Andalus) のようなところであるが、3,000パラサングである。アラビア半島とその付近は1,000パラサングである。[pp. 36-37]

……イエメンの人々にとって、そのこと（＝‘Abraha の息子たちによる支配）が長期に及んだ時、Dhū Nuwās¹⁴⁾ の子孫の一人 Dhū Yazan al-Ḥimyarī の息子サイフ (Sayf)¹⁵⁾ が出て、アンティオキア（‘Antākiya）にいるビザンツ皇帝 (Qayṣar) のところまでやって来て、彼にスーダーン人（黒人たち）¹⁶⁾ のもとでの自分たちの実情を訴えた。そして、自分たちの土地から彼らを追放し、イエメンの支配が彼のものになるように頼んだ。すると皇帝は彼に言った。「彼ら（＝スーダーン人）は

私と同じ宗教であり、お前たちは偶像崇拝者である。それで彼らに対してお前たちを助けようとはしなかったのだ。」それで彼（＝サイフ）は皇帝に失望し、ペルシア王（Kisrā）のもとへ向かった。……彼（＝Wahriz）はペルシア皇帝に「イエメンを」征服したことについて、手紙を書いた。するとペルシア皇帝は彼に手紙を書いて、イエメンの全ての黒人（'aswad）を殺してサイフをその王位に即け、彼のもとへ赴くよう命じた。そして彼はそのように努めたが、残ったスーダーン人（黒人たち）については、サイフが生きることを許し、自分のものに加え、馬に乗るとき、自分の前を速足で歩かせた。ところが、ある日のこと、行進中、彼の前を歩いていたとき、彼を襲って彼を彼らの槍で突き、ついに彼を殺してしまった。そこでペルシア皇帝はワフリズをイエメンの地に戻し、イエメンの黒人、とりわけサイフを突いたスーダーン人（黒人たち）は、その者を殺すまで許してはならないと彼に命じた。そして彼はそこに五年間滞在し、死が近づいたとき、彼は自分の弓と矢を持って来させ、そして「私を支えてくれ。」と言った。それから、弓をとって射て、「私の矢の落ちた所を見よ。そしてそこに私のために墓を建て、そこに私を葬ってくれ。」と言った。彼の矢は教会の裏側に落ち、その場所は今日までワフリズ墓地と呼ばれている¹⁷⁾。それから、ペルシア皇帝はイエメンの地にバーダーン（Bādān）を派遣した。そしてイスラム教が興るまで彼はずっとその王であった。[pp. 64-66]

〔訳・註担当箇所：Ibn Khurdādhbih, al-Ya'qūbī の部分を竹田が、al-Balādhurī, ad-Dīnawarī の部分を西尾が、それぞれ担当した。〕

註

前稿への補足：註Vの11) Marquart は Air 山地（現ニジェール西北部）より西と考えているようであり（Die Benin-Sammlung, pp. CVII-CIX), Kubbel と Matveev は Tibesti 山地及び Ennedi 高原（共に現チャド北部）に住む民 Tebu との関連性を提示する（Arab. istochniki, p. 373）。

本稿で使用する略号は以下の通りである。

資料(1)：サハラ以南に関するアラビア語資料(1)

AHA (Arabic External Sources): T. Lewicki, *Arabic External Sources for the History of Africa*, Warsaw 1969.

Arab. istochniki: L. Ye. Kubbel & V. V. Matveev, *Arabskie istochniki VII-X vekov po etnographii i istorii Afriki yuzhnee Sakhary*, Moskva-Leningrad 1960.

CHA: *Cambridge History of Africa*.

Corpus: J. F. P. Hopkins & N. Levtzion, *Corpus of early Arabic sources for West African history*, Cambridge 1981.

EI.: *Encyclopaedia of Islam* (EI¹. は旧版, EI². は新版)

History: J. S. Trimingham, *A History of Islam in West Africa*, Oxford 1962.

Tableau: R. Mauny, *Tableau géographique de l'ouest africain au moyen age*, Dakar 1961.

VII

- 1) 他に Le Livre des routes et des provinces, publié, traduit et annoté par C. Barbier de Meynard, *Journal Asiatique*, 6 série, V, 1865, p. 5-127 もある。

- 2) シフルはアラビア半島南岸、ハド라마ウト地方（現南イエーメン）の都市。アデンは現南イエーメンの首都。パラサングはイラン起源の長さの単位で、本来1パラサングは1時間に馬が歩む距離だが、アラビア語の1 farsakh は3アラブ・マイル、即ち5762.8メートル。
- 3) ハバシャは狭義にはアビシニアだが、以下の記述から見ると、Jazīra Barbar と呼ばれたソマリア半島も含む地域であり、ザンジュより北の地域の意。
- 4) シンドはインダス流域地方。バスラはイラク南部の都市。ジェッダはアラビア半島西岸、ヒジャーズ地方（現サウジ・アラビア）の都市。クルズムは紅海の西北端にあった都市で、エジプトの現スエズ北方約1マイル。そしてファールスは以下の記述から見ると、現イラン南部のファールス地方だけでなく、それより東南の地域も含む。
- 5) インド洋。
- 6) アラビア半島南部とアフリカ東海岸の間に人や物の往来があったことは周知の事実である。
- 7) ハーリジー（或はハワーリジュ）派はイスラーム教最古の一分派（657年）。スフル派はイバード派と共にハーリジー派の穏健な一派で、7世紀後半（684～695年）に成立し、北アフリカには8世紀前半には伝わっていたらしい。al-Bakrī(1094年没)の世界地誌によれば、Sijilmāsa(757/8年、ベルベルのZanāta族Miknāsa氏族の一団によってTafīletのオアシスに建てられた都市で、現モロッコ中東部のアルジェリア国境に近いRissani南方に廃墟あり)では黒人の(al-Aswad) 'Isā b. Yazīdを最初の指導者を選ぶ(*Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*, ed. M. G. de Slane, Algiers 1911, p. 149)。これは敬虔なムスリムならば、出自に関係なく黒人奴隷でもカリフになれるとするハーリジー派の信条の一つの現れである。その後、Miknāsa族の(al-Miknāsī) Abū'l-Qāsim Samghū b. WāsūlがこのSijilmāsaにスフル派の王朝を築き、孫のal-Muntaṣir, 即ちMidrār(在位823/4～876/7年)は近くに銀鉱を持つDar'aの町にまで支配権を広げる。スフル派はこのSijilmāsaを拠点に西サハラの交易活動に携わる。また、Tilimsān(Agadirとも呼ばれ、現アルジェリア北西部Tlemcenの前身)でも、Zanāta族Banū Ifrān氏族の(al-Ifrānī) Abū Qurraを指導者に765年頃からスフル派が町の実権を握るが、遅くとも812/3年頃、Idrīs 2世、即ちシーア派のイドリース朝に町の実権を奪われる。
- 8) 上アトラス山脈（モロッコ中南部）南面稜に発して大西洋に注ぐWādī Dar'a(Dra川)流域にあった町と考えられ、N. LevtzionとJ.F.P. Hopkinsは上流にある現Zagoraとする(*Corpus*, p. 446)。以下の記述やal-Ya'qūbīの後述する地理書p. 359に従えば、銀鉱の町Tāmdult(同じくLevtzionとHopkinsによれば、アンチ・アトラス山脈の南、現Tāmdoult Ou Akkaの廃墟—*Corpus*, p. 457)の近くとなる。
- 9) アビシニアだけでなく、スーダーンも含む黒人の地全体の意。
- 10) 原文にはAbū Tālibの息子'Alī(第4代正統カリフ)の息子Ḥasanの息子Ḥasanの息子'Abd Allāhの息子Idrīsの息子Idrīsとあり、Fās(現モロッコ北東部、Fez)を都としたシーア派イドリース朝(789～926年)の第2代君主イドリース2世(在位793～828年)。
- 11) 大西洋。
- 12) T. Lewickiは、後のTakrūr、即ちセネガル川下流の現Fouta ToroにあったTokolor人の国で、14世紀のIbn Khaldūnの世界史に登場するZaghāy共々、Zangui或はZanguayではないかとする(*Arabic External Sources*, pp. 17-18)。また、V. Monteilは11世紀のal-Bakrīの世界地誌に記されているセネガル川下流のṢaṅghānaとの関連を示し(*Al-Bakri, Routier de L'Afrique blanche et noire du nord-ouest, Traduction nouvelle, BIFAN, Ser. B30, p. 107*)、KubbelとMatveevは、モーリタニアのṢaṅhāja族連合の指導者であろうとする(*Arab. istochniki*, p. 338)。或はTriminghamがソングイの王朝の一つで860年?に創建されたとするZa王朝(*History*, p. 237)と関係があるのだろうか。因にas-Sa'dī(1655年以後没)のTa'rīkh as-Sūdān『スーダーン年代記』に記されているソングイ諸王にはZā-Zakuy(2代)、Zā-Akuy(4代)、Zā-Kū(5代)などという名がある(ed. O. Houdas, 1913-14 Paris, pp. 2-3)。
- 13) Lewickiは、Zāghī b. Zāghīの国とは別に扱い、伝説的な黄金の産地、セネガル川上流とニジェール川との盆地に住んでいたMandingoとする(前掲書p. 18)。
- 14) LevtzionとHopkinsは、イドリース朝がダルアを支配したことは確かだが、この記事は彼らの勢力がサ

ハラにまで広がっていたことを暗示すると言う (Corpus, p. 377)。また, Lewicki は彼らの支配がセネガ川流域にまで及んでいたのではないかと言う (前掲書 p. 18)。

- 15) アフリカ東部の黒人。
- 16) アフリカ西部の黒人。
- 17) 当時ムスリムの間に広まっていた伝承で, 次世紀のアラビア語地理文献にも登場する。
- 18) 原文では jariba, 即ち “jarab に罹る” とある。jarab はらくだの病気としてアラビア語文献によく登場する。
- 19) Ptolemaeus (168年頃没) の『地理学入門』に基づく。資料(1)本文Ⅱ pp. 85, 86-87, 註Ⅱの16)と46)を見よ。

VIII

- 1) この他にペイルート版 (1957) と, 二種のカイロ版 (1932, 1956-60) がある。また, 英訳として, P. K. Hitti & F. C. Murgotten; *The Origins of Islamic States*, 2 vols, New York 1916, 1924 がある。
- 2) Ibn ‘Abd al-Ḥakam の記述には, ‘Ubayd Allāh b. al-Ḥabāb とあり, こちらのの方が正しい。
- 3) この部分の記述は, Ibn ‘Abd al-Ḥakam のものを参照にしたと考えられる (資料(1)本文Ⅳ参照)。al-Balādhurī は軍事遠征の指導官を ‘Abd ar-Raḥmān b. Ḥabīb b. ‘Abī ‘Ubayda ‘Uqba b. Nāfi‘ al-Fihri としているが, 実際は, Ibn ‘Abd al-Ḥakam にある通り, その父親である Ḥabīb b. ‘Abī ‘Ubayda ‘Uqba b. Nāfi‘ al-Fihri が正しい (資料(1)Ⅳの註10)と20)を参照)。なお, 彼の息子 ‘Abd ar-Raḥmān は, 127/744-5年にイフリーキヤ総督になった人物である (資料(1)Ⅳの註19)を参照)。
- 4) Ibn ‘Abd al-Ḥakam は, ijjān と呼んでいる (資料(1)Ⅳの註22)を参照)。Corpus (p. 377) は, Ibn ‘Abd al-Ḥakam の中の al-bar [bar ijjān] の [] 内の部分が誤読されたためであろうとしており, また, Tarja 部族との関連性についても示唆している。
- 5) 著名なコーラン学者, 法学者。154/770年~224/838年。
- 6) 資料(1)Ⅳの註7)を参照。
- 7) 資料(1)Ⅳの註14)を参照。
- 8) この部分は, 31年 (A. H.) に行なわれたヌビア遠征についての記述である (資料(1)本文Ⅳを参照)。

IX

- 1) 他に Najaf (イラク) 版 (3 版 1377 A. H. / 1957) や, M. ‘A. Al-Farrā: *A Critical Edition of Kitāb al-Buldān by al-Ya‘qūbī*, Ph. D. diss. Univ. of Exeter, 1981 がある。
- 2) この箇所より前に, アッラーキーは商業都市のようであり, 住民の大半は Rabī‘a 氏族 (北アラビア Bakr 族 Ḥanifa 支族に属す) だ, との記述がある。下ヌビアの溪谷で, エジプト南部アスワーンの南62マイルにあったが, 現在はナセル湖に水没。9世紀後半はアスワーンを握るアラブ人 al-‘Umarī の勢力下にあった。
- 3) アッラーキーより西の地域では, 826年, al-Jarīd 地方 (現チュニジア南部の湿地帯) で1000人の黒人が斧と鋤で武装蜂起したと言う記録があり (Ibn ‘Idhārī, *Kitāb al-Bayān al-Mughrib fī Akhbār al-Andalus wa ‘l-Maghrib*, ed. G. S. Colin & E. Lévi-Provençal, I, Leiden 1948, p. 101), 黒人奴隷がこの地方の耕地化にも多数導入され, 酷使されていたことを窺わせるが, 黒人奴隷はこうした苦役に服する人夫や家内奴隷の他, アッバース朝におけるトルコ人奴隷などのように, 北アフリカの Aghlab 朝 (800~909年) では傭兵としても用いられた。
- 4) フェッザーン地方 (現リビア南西部) の中心オアシス。詳しくは資料(1)註Ⅳの17)を見よ。尚 Waddān はリビアの Surt の南にあるオアシス。
- 5) イスラーム教ハーリジー派の一派で, 北アフリカでは Tāhart (現アルジェリア中北部 Tiaret) を首都とする Rustam 朝 (776~909年) を建国し, アッバース朝下のバスラなどからイバード派の商人たちが移り住んだこともあって, ベルベル人の中で勢力を伸ばし, 西は Tilimsān (Tlemcen) 地方から東は Ṭarābul (現リビアの首都 Tripoli) 地方まで広がった。Qayrawān (当時, 北アフリカ東部の中心都市。現チュニジア北

- 東部)を首都とするスンナ派の Aghlab 朝は、領内およびスーダーン交易路のイバート派との友好を維持すべく、これらの者が Rustam 朝に救貧税を支払うのを許していた (CHA, II, p. 642)。また、黒人との関係について見ると、Ibn aṣ-Ṣaghīr(903年以後没?)の年代記に、Rustam 朝の第3代君主(イマーム) Aflah(在位823/4~71/2年)がスーダーン王に贈り物を持った使節を派遣したとある (*Chronique d'Ibn Saghīr sur les imams rostemides de Tahert*, ed. A. de C. Motylinski, Algiers 1905, p. 31) 他、Lewicki によれば、Jabal Nafūsa 地方(現リビア北西部の Jebel Nefusa)には、Ijnāw として知られるイバード派コミュニティがあり、この名は「黒い」を意味する agnaw の複数形 ignaun と読むことができるし、このコミュニティの指導者で、811/12年に Rustam 朝からこの地方の長に任命された Abū 'Ubayda 'Abd al-Ḥamid al-Janāwnī はアラビア語、ベルベル語、Kānim(チャド湖北東岸)の言葉が話すことができたとされており、イバード派のこの集団は黒人であった可能性が高い (*Etudes ibadites nord-africaines*, Warsaw 1955, p. 92-6)。
- 6) 不明。Al-Farrā は Z. wāt.h と読む(前掲論文 p. 112)。
 - 7) Levtzion と Hopkins は、M. J. Tubiana (*Survivances preislamiques en pays zaghawa*, Paris 1964) が Mira を Zaghāwa(註8)の一部族 Kobe の古い氏族としていることを紹介する (Corpus, p. 452)。また、Kubbel と Matveev は Mīrī と読み、サハラと中央スーダーンの境界に住む民であろうとする (Arab. istochniki, p. 373)。
 - 8) 現チャド南東部 Ouadai 地方と現スーダーン西部 Darfur 地方に住む民 Beri など。詳しくは資料(1)註Ⅱの5)を見よ。
 - 9) この書物の pp. 342-43 に Wādī Makhīl から Barqa(共に現リビア Benghazi より東)にかけて住むベル人 (al-Barbar) として、Luwāta 支族に属する Marāwa が挙がっているが、このマラワ人とは別である。しかし、同じヤアクービーの『年代記』に登場した Marawīyūn や al-M.r.w はこのマラワ人と同じかも知れぬ。資料(1)本文 pp. 91, 92 及び註Ⅴの11)―補足は本稿 p. 166 を見よ。Levtzion と Hopkins は Lewicki に従い、Ouadai 南部の民 Murro と述べ (Corpus, p. 452), Trimmingham も、ザガーワの一氏族 Murawa とする (History, p. 51)。また、Kubbel と Matveev は Marawī と読み、恐らく Darfur ではないかと言う (Arab. istochniki, p. 372)。
 - 10) Herodotus (424 B.C. 没) の『歴史』には、当時フェッザーン地方に住んでいた Garamantes 人が Troglodytae 人(穴居民の意で、黒人の Tebu 人の祖先)狩りをする とある (IV, 183) が、古来、黒人奴隷はチャド=トリポリ・ルートの主要な商品であったようだ。そしてフェッザーンのザウィーラ ('Uqba がフェッザーンや Kawār に遠征した660年代には存在しなかった) は、8世紀中頃までにはこのルートの奴隷貿易の主要なセンターとなっており、トリポリから入ってきたイバード派の町(761~2年、アッパース朝軍により一時、イバード派は町を追われたが)でもあった。
 - 11) サハラ南部、現ニジェールにある一群のオアシス。詳しくは資料(1)註Ⅳの13)を見よ。
 - 12) 現モロッコ南部地方。詳しくは資料(1)註Ⅳの21)を見よ。
 - 13) 本稿の註Ⅶの7)を見よ。
 - 14) ベルベルのサンハージャ族に属するとあるが、8, 9世紀のアラビア語文献が西サハラの人々を呼んだ名。Ibn al-Faqīh(903年以後没)の地理書 Kitāb al-Buldān によれば、750年代、黒人でハワーリジュ派と思われる al-Mushtarī なる人物が as-Sūs al-Aqṣā 地方(現モロッコ南部)から“アンビヤの地”へ20回も攻め入ったと語ったらしい (*Mukhtaṣar Kitāb al-Buldān*, ed. M. G. de Goeje, Leiden 1885, p. 64)。また、al-Mas'ūdī(956年没)の地歴書 Kitāb Murūj adh-Dhahab wa-Ma'ādin al-Jawhar によれば、9世紀前半の al-Fazārī も“アンビヤ地方”は、2500パラサング×600パラサングであると述べ、スィジルマサと Ghāna の間にあるとする (ed. B. de Meynard & P. de Courteille, IV, Paris 1865, p. 39)。尚、頭巾で顔を覆うのはサンハージャ族の Lamtūna 氏族などに見られることは周知の事実である。
 - 15) Awdaghust と呼ばれ、R. Mauny によれば、現モーリタニア中南部 Togba (Tidjikdja の南東約 170 km)の北西 8 km, Tegdaoust の廃墟に比定される (Tableau, pp. 71-72, 482-483)。ここは Rkiz 溪谷の出口に当たる。Trimingham は、この町は恐らく6世紀に作られたのではないかと言い (History, p. 21),

- F. de la Chapelle は、7 世紀に Soninke 人によって建てられたように思えると言う (“Moors”, EI¹. III, p. 561) が、ヤアクービーの記述当時は、ベルベルのサンハージャ族 Lamtūna 氏族の Tilutan (836/7 年没) が樹立した王国の首都で、Lamtūna 氏族は未だイスラーム化していなかったようである。そして、Sijilmāsa を北の起点とするサハラ縦断交易路ルートの南の起点となるが、de la Chapelle によれば、この王国自身は 919 年に崩壊する (同上, 同頁)。
- 16) Lewicki はガスト王による近隣の黒人地域への軍事遠征という記事は Ghāna の勢力の衰退の始まりを示すのではないかと見ている (Arabic External Sources, p. 24)。尤も Levzion によると、サンハージャ族の長たちによる黒人集団への攻撃は必ずしもサーヘル地域のスーダーンに対するものだけではなく、サハラ地域でもありうる (CHA, II, pp. 665–66)。因に al-Bakrī の世界地誌によると、961/2 年から 10 年間は 20 以上のスーダーンの王たちがサンハージャ族の Awdaghust の支配者の宗主権を認めているが、反対に、1054/5 年までの或る期間は Awdaghust が Ghāna の支配者の宗主権を認めている (ed. M. G. de Slane, pp. 159, 168)。また、この全体の記事からはスィジルマーサを起点とするサハラ縦断ルートが浮かび上がってくる。
- 17) シフルは本稿の註Ⅶの 2) を見よ。アンバル (龍涎香) は抹香鯨の体内に生じる一種の病的な分泌物で、灰色が主体。アラブ人に溺愛され、産地は広くインド洋各地の海洋とイベリア半島の海域。東アフリカの Berbera 海岸とザンジュのアンバルは、シフル産に次ぐ、或は同等の優良品とされた (山田憲太郎『香料の道』中公新書, 昭和 52 年, 96–120 頁)。また、以下の記事は本稿 p. 162 も参照。
- 18) an-Nuwayrī (1332 年没) 著の百科全書『文芸諸分野における必要の限度』のことで、この箇所は実際には at-Tamīmī (980 年以後没) が、彼の祖父がヤアクービーから聞いた話として伝えているものである。

X

- 1) この他にカイロ版 (1960) がある。また同書には、クラチコフスキーによる解説と索引 I. Kratchkovsky ed. *Kitāb al-ahbār at-tiwāl. Préface, variantes et index*, Leiden 1912 がある。
- 2) 本来は ḥabasha であるが、ここでは ḥabash とある。
- 3) 資料(1)の本文Ⅳ, Ⅴ, Ⅵの同様の箇所を参照。
- 4) 6 世紀中頃の南アラビアの王でキリスト教徒 (? ~ 560 年 ?)。530 年にアビシニアの支配下の属王を倒し、実権を握った。彼に関するアラブ側資料は、多分に伝説化されているが、ムハンマドの誕生の年 (570 年頃) に (或はその数年前に) メッカへ遠征軍を送った事で史上知られる (cf. コーラン 105 章)。なお、以下の記述は、史実というより多分に伝説化されている。(A. F. L. Beeston ‘Abraha’ EI² I pp. 102–103, 高階美行「イスラム以前のアラブ関係歴史年表」『大阪外国語大学学報』58 号 (1982) pp. 115–53 参照)。
- 5) ‘ifriqīsh と書かれる。在位 560 ? ~ 570 ? 年。アラビア語でアフリカを表わす ‘ifriqiya (北アフリカ東部を指す) が、ラテン語の Africa に由来する事は確実であるが、その言葉自体の語源については不明である。アラブの歴史家たちの多くは、このイフリーキースとアフリカという名称を関連付けてとらえ、アラブの征服以前にも (北) アフリカにアラブ人が住んでいたことの証左とした。このような考え方は、一つには北アフリカの原住民であるベルベル人が南アラビア (ヒムヤル) 或はカナン人を始祖とするというアラブ人の考え方とも関係するであろうが、より政治的理由としてアラブの征服活動を正当化しようとする試みの一端とも考えられる。アフリカという名称については、M. Talbi ‘ifrikiya’ EI² II. pp. 1047–1050 参照。また北アフリカのベルベル人とイエメンの諸王との間の系図関係については、H. T. Norris *Saharan Myth and Saga* (1972, Oxford) pp. 47–48 参照。
- 6) 資料(1)の Ibn ‘Abd al-Ḥakam, al-Ya‘qūbī, Ibn Qutayba の記述では (資料(1)のⅣの註 3), Ⅵの註 3) 参照), ハムの子孫の黒人たちの皮膚の色がノアの呪いと関連付けられていたが、ここでもアフリカの人々の容姿の異常性について同様の説明がなされている。
- 7) E. W. Lane (Arabic-English Lexicon ‘n-s’ の項 p. 2785) によれば, nasnās または nīsās と読まれる。語源については不明だが、一説によれば、「弱さ (weakness)」を意味する nasnasah の派生形とされる (nās ‘人間’ との関連性も考えられるが、不明)。また、この語が指す動物 (または人間に似た動物 ?) の

棲息地、特徴等に関しても様々な伝承記事が文献中に確認される。例えば、セムの子孫でイエメンの奥地に住み、古代南アラブ部族の一つであるアード (‘Ād) 族と関連付ける説、死滅してしまった生き物とする説、ヤゴグ・マゴグの一種と考える説等、アラブ側の記述は様々でない。現代アラビア語では、チンパンジー、オランウータン等のサル仲間、或はビグミーを指す言葉として使われており、本来はアフリカ東海岸からインド洋、そして東南アジアの島々に生息するサルの仲間を指したものと考えられる。また、ここでの記述は、スーダーン遠征の記事と関連付けられるものであり (註8)参照、アフリカ、特にインド洋岸の部分に関する記事の可能性が高い。

- 8) この部分は、「～後方の海 (=インド洋) の岸～」ということであり、イエメン側というよりアフリカ側の海岸部を指すものと解釈できる。
- 9) 本来は、古代南アラビアに先住していたアード部族系の一部族を指すものと考えられるが (W. M. Watt ‘Iram’ EI² III p. 1270 参照)、この部分のような記述は、イスラム教徒の歴史家達が聖書にあるセムの子アラムと同一視し、聖書の系図の中に取り込んだためである。
- 10) 地理上は、ナジュラーン (Najrān) とハドラマウト (Ḥaḍramawt) の間にある地点を指す。また、民族上は、多分に伝説的要素が濃いが、アラビア半島に先住していたとされる (アラブ系の) 人々 (cf. al-‘arab al-bā‘ida ‘true, original Arab’) の中の失われた一部族であるとされる。詳しくは、J. Tkatsch ‘Wabār’ EI¹ VIII p. 1974 を参照。
- 11) アレキサンダーとアフリカ遠征については、Norris ibid. pp. 11-53 参照。
- 12) アラビア語は、ghurāb (pl. ghirbān)。アラブ・イスラム世界でも、鳥は様々な比喻表現で使われるが、ここでは「黒」の象徴として使われている (cf. “tāra ghurābu fulān-in 「某氏の鳥が飛んでいった→某氏が白髪になった」”)、また、鳥は「土地の肥沃さ」の象徴 (cf. “waqa‘a fi ‘ard-in lā yuṭayyaru ghurābu-hā 「草木が豊かなので鳥が飛んでいかない土地に彼はやって来た」”)、「狡猾さ」の象徴 (cf. “fulān-un ‘abşaru min ghurāb-in 「某氏は鳥より目が利く」”)として使われることもある。
- 13) ‘Abd Allāh b. al-‘Abbās。ヒジュラの三年前に生まれ、68/686-8年目頃 Ṭā‘if で没した。最も初期の世代に属するイスラム教徒学者の一人で、アッバース朝創始者の祖父にあたる。エジプトその他の軍事遠征に参加した。
- 14) Yūsuf ‘Ash‘ar Dhū Nuwās。イスラム以前の南アラビアの王で、517 (518?) 年に即位し、525年にアビシニアとビザンツの連合軍により攻められ、騎馬と共に海に入り死んだとされる。その最後をもって独立南アラビアは終焉した。史上、ユダヤ教に改宗し、ナジュラーンでキリスト教徒を迫害したことで有名である。
- 15) Sayf 及び以下の記述にある事件については、資料(1)の本文Ⅵ及び註(6)を参照。
- 16) ここではスーダーン人がハバシャつまりエチオピア人を指す。資料(1)のⅥの註(10)を参照。
- 17) 弓を射て、矢が立った場所に自らの墓を建てるという筋は、流布本中のロビン・フッドの最期の場面と同じである (詳しくは、上野美子『ロビン・フッド伝説』研究社 1988 pp. 184-5 を参照)。両者間に直接的関係はないであろうが、弓を射て、人知を超えたことについて占うという慣習は古今東西を通じて多くの民俗習慣に観察される (例えば、日本では「白羽の矢が立つ」という言葉からもうかがわれる) (井本英一『死と再生』人文書院 1982 pp. 324-8 を参照)。西アジア世界においても同様であり、特にイスラム以前にはアラブの間で maysir と呼ばれる賭矢が流行した。